



それから5人は駅のオフィスに連れて行かれて、たっぷりお説教を食らったわけだ。旅行者、しかも学生ということで、お説教と始末書ですんだのは不幸中の幸いと言えるのだろうが、ようやく解放された頃には、すっかり全員うちひしがれていた。

「結局、乗る予定の列車には乗り遅れちゃったねえ。どうしよっか」

「あんたねえ、それはいったい誰のせい？」

サラに美空が突っ込むのだが・・・

「そりゃ、はっきりしてるんじゃない？ねえ、ムラカミくん」

「いや、悪い、悪かったよ」

「このデブが悪いのははっきりしてるけど、そもそも裏道なんか通らなきゃ、つてのもあるわよねえ」

「もうやめようよ。どのみち僕らは一蓮托生なんだしさ」

ちよつと雲行きが怪しくなってきたところで、アンリが口をはさむ。

「そうそう。まず、これからどうするかを考えるのが先じゃないか？」

フランクもおさえ役にまわる。たしかに、ここで言い争ってもしかたがない。なんとか、目的地のホテルまでたどり着かないことには、ここで野宿するハメになる。

「もう最終列車は出ちゃったのかな？」

と、アンリ。

「ちよつと駅のオフィスで聞いてくるよ。ここで待っててくれ」

デιβはそう言うと、駅の方へ走って行く。ちよつと責任を感じているようだ。

「デιβ、結構気にしてるみたいだな」

フランクが言う。

「当然よ。誰のせいでこんなことに？ 今夜のディナーはディブの奢りよね」

美空はかなり不機嫌そう。経験上、こうなった美空はあまり刺激しない方がいい。なだめるつもりが、逆に怒りを煽ってしまう可能性もあるからだ。それは全員心得ているので、誰もそこは突っ込まない。そうこうしている間にディブが小走りに戻ってきた。

「よかった。到着便に遅れが出ているみたいで、このあと臨時列車が一本あるらしい。発車は30分後だった」

「そりゃよかった。どうにか野宿はせずにすみそうだね」

「当然よ。野宿なんかごめんだわ。乗れなかったらディブ持ちで高級ホテルでしょ」

アンの一言が、またちよつと美空を刺激してしまったみたいだ。

「もう勘弁してくれよ。埋め合わせはするからさ」

「じゃあ、今夜のディナーはディブの奢りね。それで手を打つわよ」

「えー、そんなあ」

「なんか文句でも？」

と、そんな会話をしつつ、5人は次の列車を待つことになる。目的地のウエスト・リムは文字通りコペルニクスの西側の外周部に接しているリゾートエリアである。ここから距離は50 Kmほど、ローカル列車でもほんの10分ほどの距離だ。だが、列車を逃すと他に交通手段はない。なにせ、外は真空の月面なのである。コペルニクス宇宙港は24時間運用だが、都市には、それぞれに標準時が設定されていて、おおむね、各宇宙都市の8時間タイムゾーンと同期している。コペルニクスエリアは、宇宙都市タイムゾーンのゾーン1と同じ時間帯なので、そろそろ夜中に近い。ホームにも人影はまばらだ。

やがてプラットフォームに短い編成の列車が入ってくる。コペルニクススクレーター周辺エリアを結ぶローカル列車は、すらっとした流線型のコンパクトな列車だ。まあ、流線型というのが単にデザイン的な意味合いしかないことは言うまでも無い。ほとんどの区間は真空のトンネルを走るのだから。内部も飾り気はなく、座席なども実用本位のシンプルな形をしている。

ドアが開くと5人は列車に乗り込んで、ドアに近い一角を占領した。

「なんか、どこにでもありそうな列車よね。もうちょっとリゾートらしい雰囲気にはできないのかしらね」

車内を見回して美空がつぶやく。

「このあたりのローカル列車はみんなこんな感じだからね。ウエスト・リムだけ特別ってわけにはいかないんだろうな」

と、アンリ。

「そっか、アンリはコペルニクス、始めてじゃないんだよねえ。これまで何回来てるの？」

サラがアンリを見て言う。

「まだ一回だけだけどね。このまえ学会があつて、ノース・リムのゲノム研究センターまで来たのが初めてだよ」

「ノース・リムかあ、あそのリサーチコンプレックスには一度行ってみたいんだよな」

とフランク。

「お前も研究畑に進む気になれば、いつでも行けるじゃないか」

「いや、だから、それが悩ましいんだって」

ディブは簡単にそう言うが、フランクにとって、目下最大の悩みがパイロットか研究者かという将来の進路なのである。

「ま、そんなに焦って進路を決めることはないと思うよ。人生、どこで転機が訪れるかわからないんだしさ」

サラはそう言うと言とフランクの肩を、ぼんつと叩いた。

「ったく、そんな悠長なこと言つてると、あつという間に卒業よ。専門課程に行く前に、あの程度進路を決めておかないと、後で後悔することになるんだから」

美空が脇から突っ込みを入れるのだが、サラは平然としている。

「まあ、私はどのみちC&Iだしね。宇宙船乗りか航路局勤務くらいしか道はないから気楽だよ」

「その前に落第しないでね。処理能力は高くても、詰めがちよつと甘そうだから」

今日の美空はちよつと絡みっばい。まあ、サラはそのあたりは気にしない性格だから、衝突するようなことは滅多にないのだが。

「ちよつと発車が遅れてるね。ステーション3からの便の乗客待ちみたい。もう10分くらい前に到着はしてるみたいだから、もうすぐ発車するんじゃないかな」

美空の話を無視するようにサラが言う。ステーション3は八つある地球静止軌道ステーションの一つで、これも巨大な宇宙都市である。こうした地球近傍のステーションは地球と月やL2のような地球公転軌道周辺の都市、そして惑星間、恒星間航路の中継ポートになっているのである。

「でもまあ、おかげで僕らは助かってるわけだけどね」

とアンリ。そのうち、遅れていた便の乗客らしい人たちが何人か、小走りにホームに降りてきて、列車に乗り込んでくる。ほぼ同時に、まもなく発車のサインが表示される。

「やっと発車か。早くホテルに着いて飯が食いたい」

ダイブが言う。

「まったく、みんなを騒ぎに巻き込んでいて、自分の胃袋の心配とはいいい度胸じゃない」  
すかざず美空が突っ込む。

「でも、たしかに腹が減ったな。ホテルにチェックインしたら、まずは飯にしよう」

と、フランク。車内のアウトバンドで発車のサインが流れ、ドアが閉じる。

「あれ、まだ人がいるよ」

サラが言うので、外を見ると、男女の二人連れがホームに駆け込んできた。乗り遅れたか……と思った時にドアが開いて、どうにか二人は乗ることができた。大きな荷物をかかえた男の方は、いかげん倒れそうな顔をしている。到着ゲートからここまで、あんな荷物をかかえて走ってくれば、少々体力があっても、相当きついだろうに。地球からの観光客だろうか、その二人は座席に座ると、下を向いて苦しそうにあえいでいる。

「なんとか乗れてよかったねえ。ここに置いて行かれたら辛いよね」

サラがそう言うのと、ほぼ同時に列車が動き出した。ホームを離れて、エアシールドを通過したあと、列車は一気に加速する。とは言っても、窓の外でトンネルの灯りが一気に流れる以外に加速感はほとんどない。この列車にも慣性制御がかかっているから、この加速でもGはほとんどかからないのである。既に列車は時速にして数百Kmで突っ走っている。この速度なら、クレーターの端までは、それほど時間はかからない。あちらの二人連れの呼吸が落ち着く前に到着してしまうだろう。

「あれ、ホテルはなんて名前だったっけ？」

とフランクが尋ねる。

「えっと、たしか、ホテル・オールドリンだったと思うよ」

と、サラ。

「いかにもって名前よね。歴史の授業じゃないんだから。しかも、アームストロングじゃないって、オールドリン？」

美空が不満げにつぶやく。

人類の月探査の歴史をひもとけば、必ず出てくる名前が、ニール・アームストロング、つまり700年ほど前に月面への有人着陸を最初に成功させた、アポロ11号の船長である。月面に降り立った時、一人の人間にとっては小さな一歩だが……という名台詞を残した彼と共に

月に降りた飛行士がバズ・オールドリンだ。つまり、ナンバー2なのである。もちろん、歴史上輝かしい名前ではあるのだが。

「しょうがないよ、予算が限られてるんだしき。それでもロコミは悪くなかったんだよ」

サラが言う。ホテルは彼女がVUで探して手配したのだから、不満を言われるのはちよっと面白くないのだろう。ちなみにVU(ヴィュー)というのは、大昔風に言えばネットのことだ。今では、地球を中心にして太陽系内の惑星や宇宙都市すべてを、ワイプ通信チャンネルを使って、ほぼリアルタイムに結んでいる。それを通して仮想現実をも共有できるので、ヴァーチャル・ユニバース、略してVUと呼ばれるのである。さすがに恒星間では、ハイレベルのワイプ通信でも遅延が大きくなるので仮想現実はいまのところ伝送できていない。

「駅から車で10分ほどかかるんだっけ。コペルニクスを一望できる展望ラウンジとか、地球を見ながら泳げるプールとかもあるんだよね」

とアンリが付け加える。

「まったく、子供じゃあるまいし。展望台とかプールとかで浮かれてるわけ？」

「でも、無いよりはいいんじゃないか？」

まだ絡んでいる美空にダイブも隣でフォローするのだが、美空はちよっとふくれっ面をする。

「でもさあ、展望台はさておき、プールは大人の楽しみ方もあるんじゃない？」

とサラ。

「ふん、そりゃあんたはいいわよ……」

美空はちよっと自分の胸元に視線を落として、もじもじとする。まあ、サラと比べれば、誰が見ても明らかなのだが、さすがにこれは突っ込めないところである。

「そろそろ到着だな」

ちよっと気まずい雰囲気になりかけたところでフランクが言う。間もなく、速度がぐっと落

ちて、列車は明るいプラットホームに滑り込んだ。

「よし、降りるぞ。とりあえずホテルに入って飯でも食わないと腹が減って死にそうだ」

「そうね。今夜は、あんたの奢りだから豪勢にいかうか」

「おいおい、お手柔らかに頼むよ、貧乏なんだから」

そんな感じで5人はウエスト・リム駅のホームに降りる。列車は、ここからコペルニクスの外周に沿って一周するのだが、乗客はほとんどがこの駅で降りたようである。5人も、他の乗客たちと一緒に、上のフロアにある出口に向かって歩き出した。



駅前の車寄せは、もう行列ができはじめていた。この駅も地下駅なのだが、天井はかなり高く明るので閉塞感はまったくくない。昔の宇宙都市では、その閉塞感から精神的にまいってしまふ人が多かったと言われているが、今はもうそんなことはない。住み慣れると地球暮らしよりも快適なほどだ。

「結構並んでるな。急ごう」

アンリがそう言うと、5人は小走りに車待ちの行列の最後尾に向かう。大昔なら駅のタクシー乗り場といったところだが、この時代の「車」は、全自動の交通システムだ。こうした宇宙都市には専用道路が張り巡らされていて、ほとんどの場所へこれで行くことができるのである。乗るのは簡単だ。乗り場に行つて、そのアウトバントに表示されているボタンに触れるだけである。利用頻度が高い乗り場には、車が待っているし、いなくても1分以内に配車されるから、こうして大勢が並んでいなければ、ほとんど待ち時間は無い。

「ホテル・オールドリンまでお願い」

サラがそう言うと、機械的な声で返事があつて、5人を乗せた車は静かに走り出す。駅前のロータリーから道路への合流もスムーズだ。しばらく走ると幹線道路に出る。本線には多くの車が走っているのだが、まるで計ったかのように、減速もせずに合流できる。これは、走行中の車が自律的に間隔を調整するからだ。同時に、運行スケジュールはすべて集中管理されていて、渋滞や遅延はまったくくない。乗った瞬間に到着時刻がわかるから便利である。

しばらくトンネルを走ったあと、車は地上に出る。月面で地上を走る道路は、こことティコ外周のリゾートエリアくらいである。観光地だからなのだが、普通は地下に作る方が安上がりなのである。この道路を覆っている強化シールドは宇宙都市のそれと同じで、有害な放射線をカットしたり、明るさを調整したりする機能がある分、コストがかかる。

「そろそろ日没だね」

アンリが言う。日没と言っても空気の無い月なので、地球のような夕焼けなどはない。そもそも、昼も夜もそれぞれ二週間続くから、これからは、しばらく夜である。月を訪れる観光客



の多くは夜の時期を狙ってくるのだが、それは、もちろん、今、頭上に光っている、半分欠けた青い星、地球の眺望を楽しむためにほかならない。地球だけではない。星空もまたすばらしい。特に日没直後と日の出直前は、地球が欠けた状態だから、星がよく見える。それだけではない。地球の夜側には、一面に都市の灯りがまたたいている。夜が更けるにつれて、地球は満ちていき、一週間で、よくあるスナップ映像のような、丸い地球になるのである。

「この景色も好きなのよね」

と美空が言う。ちようど太陽が地平にかかりはじめる頃、周囲の山の影が月面に長く伸びて、幻想的な雰囲気をかもしだすのである。空気の無い月では、太陽が沈むと温度は一気に二百度も下がる。灼熱地獄から極寒の砂漠に変わるのだ。長い影は忍び寄り寒さの前触れでもある。

「私はこの空の方が好きかな。地球、天の川、それから天使の首飾り。ロマンチックじゃないか」

サラが空を見上げながら言う。ほぼ真上にある地球の周囲には、明るく輝く光がいくつか見える。8基ある地球静止軌道ステーション、それから月軌道面に3基あるルナステーションのいくつかである。巨大な宇宙都市は極方向から見ると地球の首飾りのように見えるので、天使の首飾りと呼ばれている。これらのステーションのうち古い物は、建造されてからそろそろ300年になる。もちろん、定期的にリニューアル工事が行われているので、そんな古さなどみじんも感じないのだが。

建設のための資材は地球ではなく、すべて月から供給されている。月で採掘、精製された資源を使って月面の工場で組み立てられたモジュールを、大型のマストドライバーで軌道の上に上げた方が、地球から送るよりもずっとコストが低いのである。

そんな話をしている間に、車はまたトンネルに入る。もうすぐ目的地に到着だ。トンネルの分岐をいくつか通って、車はホテルのロータリーに滑り込む。ホテルそのものは半地下構造だが、エントランスと庭の部分は天井が透明な強化シールドになっていて、空が見える。もう太陽が沈みかけているので、明るさは人工の照明で保たれている。少し薄暗いのは、夜の時間帯だからだろう。

5人はホテルのエントランスで車を降りた。エントランス脇の庭にはプールがあるのだが、さすがにこの時間に泳いでいる客はいないようだ。

「ほら、プールがあるよ。誰もいないから、今なら美空もゆつくり泳げるんじゃない？」

サラが笑いながら言う。

「ほっとしてくれる？」

美空の反応は言わずもがなである。こうした女子同士の会話には、男子たちの入り込む余地がない。そもそも、下手に突っ込んだら命取りだ。とりあえず、5人はホテルのフロントに向かった。